

二一世紀に読むドイモイ

土佐美菜実

一九八六年一二月の第六回ベトナム共産党大会で打ちだされたドイモイ政策が三〇年目を迎えた。ドイモイ路線を堅持してきたベトナムでは二〇〇八年に一人あたりGDPが一〇〇〇ドルを突破し、今や中所得国の位置付けにある。その間、世界はソ連の崩壊や各国での民主化運動そして今日ではあたりまえとなったグローバルゼーションなど、実に多くのことを経験してきた。イギリスのEU離脱や二〇一六年アメリカ大統領選挙にみられるように、世界の様相に大きな変化が予想される今日において、ベトナムの歩んできた道とこれからの行く末をつぶさに見ていくことは、ベトナム地域研究を越えた示唆を私たちに与えてくれると思われる。以下ではベトナム社会についてドイモイ政策を主軸に分析・考察した比較的最近に刊行された日本語図書をいくつか紹介したい。

まず、ドイモイとは何であるか、というところから頭に入れておきたい場合には**今井昭夫・岩井美佐紀**編著『現代ベトナムを知るための六〇章』(二〇二二年、明石書店)の第V部「ドイモイ下における政治の諸相」を一通り読むことをおすすめしたい。ドイモイ開始の経緯に始まり、ベトナム共産党、情報統制、行政機

関、国際関係など、ドイモイ下での様々なベトナムの体制変化について簡潔な文章でまとめられている。

グエン・スアン・オアイン著、**片岡利昭**訳『ドイモイよ蘇れ ゆたかな社会をめざして——発展的ドイモイの提言——』(二〇〇三年、ピスタピー・エス)は、南ベトナム時代には副首相も務めた、ドイモイの生みの親とも言える経済学者グエン・スアン・オアイン氏自らが、ドイモイ開始の歴史的背景や経済政策としてのドイモイを細やかに分析した一冊である。また本書の最後において、政策開始からドイモイの展開を見つけてきた著者によるドイモイ達成度のレビューがあり、現在のベトナムに対する課題が提示されている。

次に**鎌田隆著**『ベトナムの可能性——ドイモイの『未来社会像』——』(二〇〇六年、シイム)ではドイモイによる成果や課題のほか、主婦、経済学者、少数民族など、現地調査から得たドイモイ下ベトナムに関する様々な現地の声を、ベトナム在住の日本人も含めて拾い上げている。後半部分では医療・福祉・教育の各分野の民間および外国支援へのやむを得ない依存の現状について解説するとともに、日本のNGOによる支

援活動も紹介している。同じく障害者を中心とした教育・福祉政策の考察と近年の状況については、**黒田学**ほか編『胎動するベトナムの教育と福祉——ドイモイ政策下の障害者と家族の実態——』(二〇〇三年、文理閣)がある。本書では、「ベトナム盲人協会」などの当事者組織の動向や、近年に開始された障害児教育教員養成制度の実態や課題について詳細にまとめられている。

古田元夫著『ドイモイの誕生——ベトナムにおける改革路線の形成過程——』(二〇〇九年、青木書店)は「シリーズ 民族を問う」のひとつとして出版された。このなかで著者は、ドイモイの提唱はソ連によるペレストロイカの影響は否めないがベトナム現地における「下からのイニシアティブ」こそが重要な役割を果たしたという視点のもと、ドイモイ路線形成史を論じている。地方における配給制度や価格決定の実験的な見直し、共産党指導部内での論争を通じて、「ドイモイ路線の形成は：ベトナムにおける『民族化』の道を切り開くものだった」というベトナム独自の文脈を明確にしながら形成過程を描いている。さらに著者は二一世紀に入り外国人研究者がアクセスできる関連資料の公開が進んだという研究事情の変化を指摘しており、従来の研究からのさらなる展開が可能になったことを示している。

最後に、ドイモイ下のベトナムで呼応し合う「国家」と「社会」の関係性を軸に論じた**寺本実編著**、**岩井美佐紀・竹内郁雄・中野亜里**著『現代ベトナムの国家と社会——人々と国の関係性が生み出す「ドイモイ」のダイナミズム——』(二〇一一年、明石書店)を紹介したい。本書では、単なる経済路線の転換にとどまらないドイモイ政策を開拓移民事業、障害者生活、市民社会などの様々な次元から分析を試みている。現体制が強く維持される中で、社会(国民)の存在を能動的な主体のひとつと捉え、具体的な事例のなかで国家との関わり合いを論じている。

(とせ) みなみ/アジア経済研究所
図書館